【資料 1】

平坦部の植栽の変遷

目　次

1.　江戸中期～末期・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・1-1

2.　明治期・・・1-5

3.　大正期・・・1-12

4.　昭和（戦前期）・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・1-16

5-1.　昭和（戦後期）～シルクロード博覧会・・・・・・・・・・・・・・1-20

5-2.　植栽関係の記録　昭和（戦後期）～現在・・・・・・・・・・・・1-26

5-3.　航空写真の比較（1961・1979・2008）・・・・・・・・・・・・・1-35

奈良公園平坦部　植栽の変遷　イメージ・概観・・・・・・・・・・・・1-44

1．江戸中期～末期

〇主な出来事　嘉永3年（1850）　東大寺、興福寺境内に桜、楓を植栽

〇大和名所図会　興福寺　寛政3年（1791）

・享保2年（1717）の大火によって主要伽藍は焼亡し、東金堂と五重塔が辛うじて存在する。東金堂の北には明治維新に廃絶した細殿・食堂がある。南円堂は寛保元年（1741）再建。
・境内には樹木が少なく、外周にマツがまばらに描かれている。東金堂前には花の松が描かれている。

・猿沢池の外周には樹木は殆ど無く、楊貴妃桜、衣掛柳、猿塚の松のみ描かれている。
（中世頃まで池南西に猿塚があり、興福寺で修行中の弘法大師に日々菓子を供えた猿の墓と伝えられている。）

〇奈良名所東山一覧之図（幕末期※）　※絵画の内容、作者の経歴から1850年頃と想定される

・興福寺から大仏殿あたりまでマツが描かれている。
・興福寺には花の松、猿沢池には楊貴妃桜や衣掛柳、猿塚の松が描かれている。

〇旅亭金波楼 版画　文久3年(1863)　出典:「目で見る大和路」口絵　藤井辰三 昭和62年

【楊貴妃桜】サトザクラの一品種。花は八重で4月ころ咲き、花びらは淡紅色であるが先端は濃紅色。奈良興福寺の僧玄宗がめでたことからの名という。《季 春》「むれ落ちて―尚あせず／久女」：大辞泉

部分拡大図

・大仏殿から二月堂に掛けてはマツが主体で手向山神社周辺にスギが描かれている。

・春日大社付近はスギ、御蓋山山頂はモミが描かれている。

・五重塔から南大門、南円堂に掛けてマツが、猿沢池の北側には「八重桜」（楊貴妃桜）が、東側には衣掛柳が描かれている。

○奈良県資料「公園の樹木・松」 抜粋

承和8年（841年）には春日山での伐採の禁制が行われたため、春日山以外の花山・芳山への木材の依存が急激に増加する。以後の森林は伐採の繰り返しによる土壌の痩悪化と共に松林に移行することになる。奈良公園の松は、歴史的に詳細に記載された記録は少ないが、東大寺や興福寺の創建等に深く関係し、花山や芳山等の松林の活用は盛んに行われたと記録されている。

奈良公園での松の植林は15世紀の室町時代にさかのぼり、猿沢池畔を中心に大乗院山、天満山等に松林の植林が行われたとあり松苗が鹿野園領より徴収されている。この頃の松苗は天然の赤松の稚苗であったと推測される。

明治13年の奈良公園の開設当時は、公園各園地では、かなりの赤松林が点在したと考えられ山林部の芳山では赤松の二次三次の疎林が成立していたものと推測される。

江戸中期から末期にかけての主要植栽

・興福寺　・・・・・・・・マツが主体。「大和名所図会」（1791）では極僅かだったマツが、「旅亭金波楼 版画」(1863）では五重塔や南円堂付近にマツが数多く見受けられ、嘉永３年（1850）頃の植栽によるものであることが伺える。いずれにも花の松（クロマツ）が描かれており、名木として知られていた。

・猿沢池　・・・・・・・・樹木は少ない。いわれのある樹木として楊貴妃桜（サトザクラ）、衣掛柳（シダレヤナギ）が名木として知られていた。

・東大寺　・・・・・・・・マツ主体の植栽が伺える。（主にアカマツと推察される）。手向山神社周辺はスギが多い。

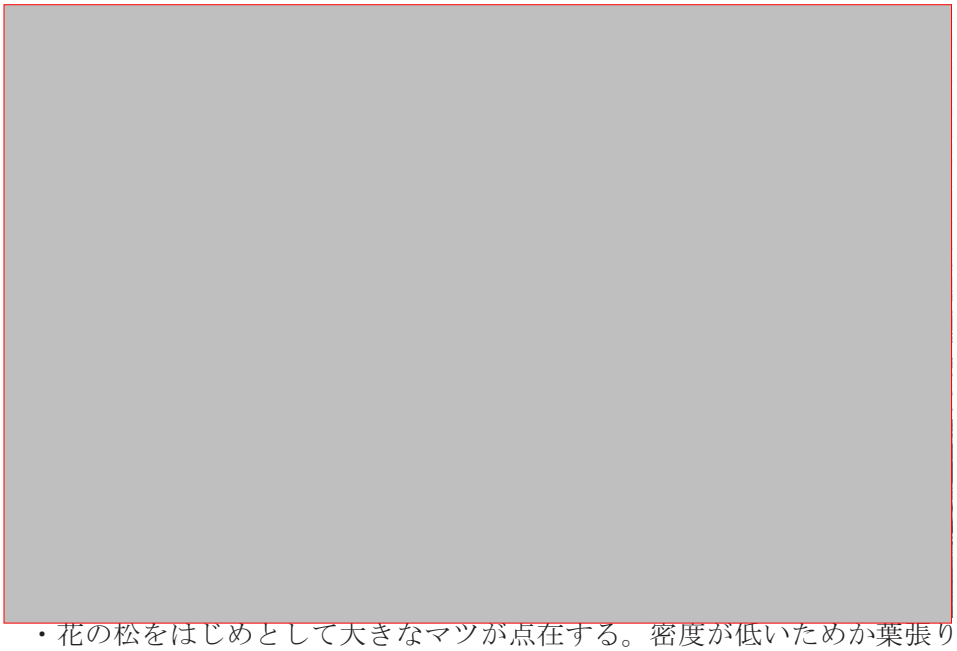
・春日大社　・・・・・・・・山林としてスギやモミ等の樹木が描かれている。

2. 明治期

○主な出来事

・明治 8年（1875）　興福寺境内に花木植栽
・明治11年（1878）　若草山山焼き　復活
・明治21年（1888）　猿沢池池畔に枝垂柳、堤には霧島躑躅を植栽
・明治22年（1889）　新奈良公園地（奈良県立奈良公園）告示
・明治22（1889）～同36年（1903）
　公園平坦部に松、桜、楓、梅、百日紅、柳など約9000本を植栽
・明治28年（1895）　帝国奈良博物館　開館
・明治43年（1910）　奈良公園内に春日野運動場開設

○写真：東金堂と花の松　明治20（1887）頃　出典：「目で見る大和路」藤井辰三 昭和62年



・花の松をはじめとして大きなマツが点在する。密度が低いためか葉張りが大きい。

○写真：猿沢池　明治5年（1872）　出典：東京国立博物館蔵

・ほぼ江戸期の絵図と同じ状況。猿沢池池畔や周辺植栽地に樹木はない

〇写真:猿沢池　明治31(1898)頃　出典:「目で見る大和路」藤井辰三 昭和62年

・植栽されたマツ、サクラ、シダレヤナギ等が見える。興福寺はマツの大木が点在。

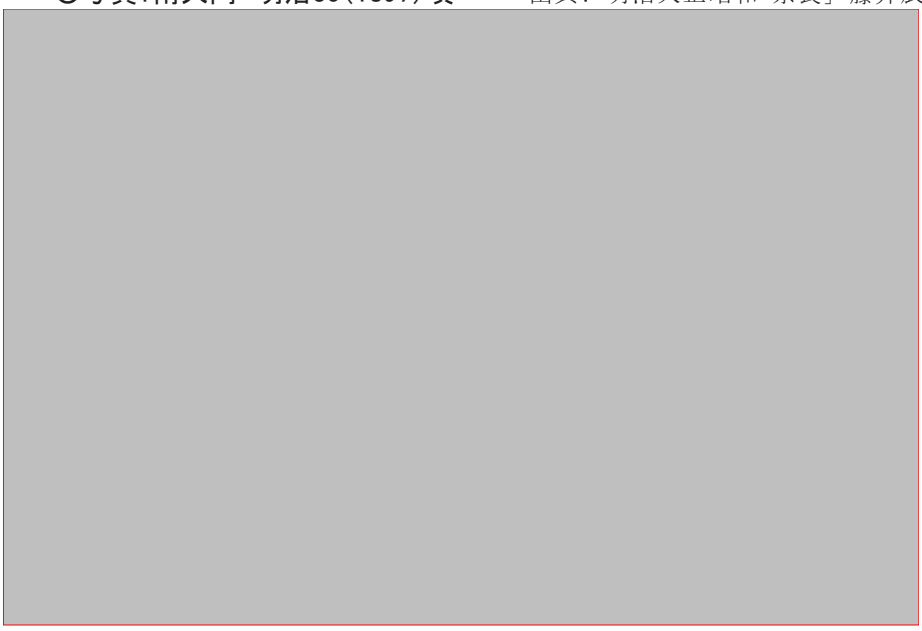
〇写真:帝国博物館　明治45(1912)　出典:国立国会図書館「写真の中の明治・大正」

・マツの若木が植付けられている。マツ以外の高木は見当たらない。

○写真：南大門石橋入口　明治19（1886）　　出典：「目で見る大和路」藤井辰三 昭和62年

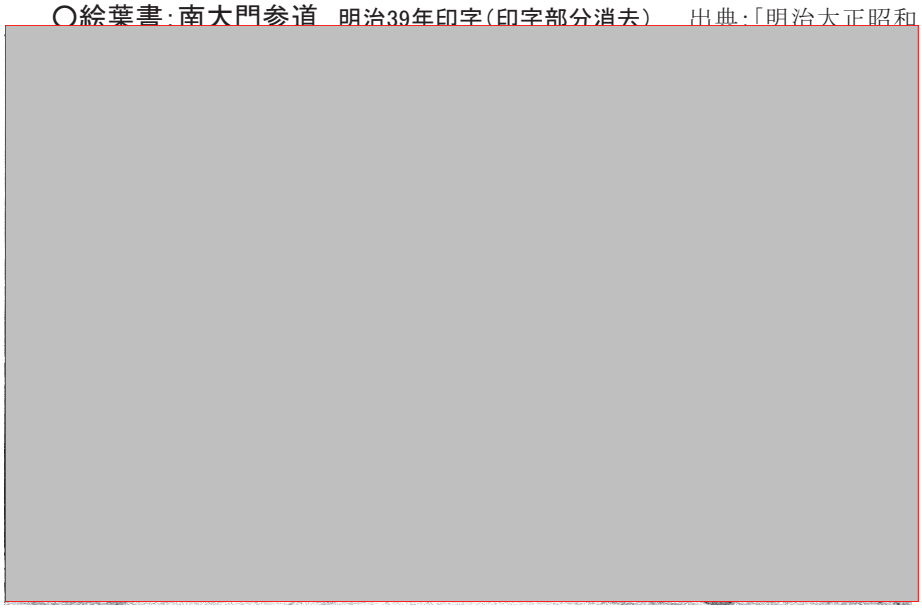
・マツが両側に立ち並ぶ。
・樹高の高いマツの間に、やや低いマツが見られる。マツ以外の高木は見当たらない。

○写真：南大門　明治30（1897）頃　　出典：「明治大正昭和 奈良」藤井辰三 昭和54年



・マツの苗木植栽が見られる。鹿除け柵が特徴的。

○絵葉書：南大門参道　明治39年印字（印字部分消去）　　出典：「明治大正昭和 奈良」藤井辰三 昭和54年



・新植されたマツの生長が見られる。現在残るマツと考えられる。

○写真:二重目東大寺　明治6年頃　　出典:「明治大正昭和 奈良」藤井辰三 昭和54年

・大仏殿周辺には、マツ林が広がる。
・出典資料内の記述には、「画面下半分、松食虫にやられた木が伐られて、少し疎らになったくらいで変わりなく‥」とあるが、明治期はマツノザイセンチュウによる被害はない。

○奈良名勝全図　明治31(1898)

部分拡大図

・興福寺境内には、マツの間にサクラらしい樹木が描かれている。花の松、衣掛柳も健在。

・南大門参道や大仏殿周辺にはマツが、鏡池や手向山神社の周辺にはスギが描かれている。

・春日大社参道の両側にはスギが描かれている。

○奈良公園改良案　明治22年県議会議事

明治22年の公園区域の拡張に伴う公園改良事業案について、県議会において議論され、春日裏山の樹木伐採による収入で事業をまかなう案は修正され、樹木伐採は取りやめとなった。そして、この議論により、「奈良公園是」が確立された。（以下、議事内容からの抜粋。）

①奈良公園改良　修正案　理由　　『奈良公園史』163 頁上段

道路は勿論、全体の地勢風光は従来の儘総て之を保存し、其旧形に従て適当の修繕を加え、新たに道路を開鑿し樹林を伐採し地勢を変更する事等は一切之を禁じ、而して自然の地勢に従い、字片岡に於て一の瀑布を設け、尚を松・杉・桜・楓の四種に限り適当の場所に増植して其風光を補い、且つ桜は吉野桜に限るものとし、右四種類の外海棠・花菖蒲・山吹等の如き華美なる花卉は如何なるものと雖も之を栽培するを止め‥‥

②奈良公園改良　修正案　趣旨説明　　『奈良公園史』163 頁下段

奈良公園の長所は已に陳述したるか如く千有余年生い茂りたる樹木にありて、其優美高尚なる風光は実に他の企及す可からざるものとす、之れありてこそ天下の人普く之を賞し以て日本帝国の公園とも称し得べき‥‥‥‥奈良公園の特色は松の欝蓊たる間に純白雪の如き桜あり、杉の森々たる中に深紅錦の如き楓あるを以てにして、是れ即ち宇内に冠絶する所以なり、‥‥

【欝蓊】：草や木が盛んに茂っているさま。

○公園平坦部の植栽

※1:『奈良公園史』225頁～228頁　※2:『奈良公園史』135～136頁

明治21年(1888)	猿沢池池畔に枝垂柳など、堤には霧島躑躅400本、計530本を植栽　※2
明治22年(1889)	興福寺境内･東大寺南大門前後に柳と松を植栽　※1
明治25年(1892)	興福寺、東大寺旧境内に桜、楓など数百本を植栽　※1
明治26年(1893)	東大寺、浅茅ヶ原に梅・桜、楓数百本を植栽　※1
明治27年(1894)	公園平坦部に花樹1468本を植栽　※1
明治30年(1897)	公園平坦部に楓405本、桜196本、柳、松、百日紅各100本を植栽　※1
明治31年(1898)	公園平坦部に桜、楓、柳、百日紅数百本を植栽　※1
明治32年(1899)	公園平坦部に桜、楓、梅数百本を植栽　※1
明治34年(1901)	公園平坦部に楓750本、梅160本、桜50本を植栽　※1
明治35年(1902)	公園平坦部に梅、桜、百日紅計3200本を植栽　※1
明治36年(1903)	公園各所に花樹1710本を植栽　※1

上記の高木を合計すると約9000本となる。

明治期の主要植栽の変化

・植栽の考え方‥‥公園整備に関する議論を通じて歴史と風致を重視した公園として位置づけられた。この中で（ⅰ）樹林を伐採し地勢を変更することを禁じ、（ⅱ）松・杉・桜・楓の四種を主体に植栽することとし、実際に松・杉・桜・楓、柳、百日紅などが植栽された。

・興福寺　‥‥‥‥花の松は健在。これまであったクロマツに加えて、公園整備によりサクラ等が植栽された。

・猿沢池　‥‥‥‥楊貴妃桜、衣掛柳は健在。公園整備によりマツやサクラ、シダレヤナギが植栽された。

・国立博物館　‥‥博物館の整備に伴い、クロマツが植栽された。

・南大門参道　‥‥これまであったクロマツに加えて、公園整備によりクロマツが植栽され、並木状になった。

・大仏殿寺周辺‥‥江戸期同様にマツ主体の植栽が伺える。鏡池、手向山神社周辺はスギが多い。（松食い虫の被害によりアカマツが減少したという記述は、誤解の可能性が高い。）

・春日大社　‥‥‥参道の両側はスギ。大きな変化はない。

3. 大正期

○主な出来事

・大正11年（1922）3月8日　名勝奈良公園　名勝指定

○ 花の松と文殊堂　　出典:「奈良名勝写真帖」奈良市役所 大正4年発行

・花の松は健在。マツが立ち並ぶ中に、植栽されたサクラが見られる。

○ 猿沢池池畔より五重塔付近を望む　　出典:「奈良名勝写真帖」奈良市役所 大正4年発行

・五十二段が改修されている。その西側斜面地では中腹にマツ法面裾にサクラが、池畔にはシダレヤナギが見られる。五重塔は４層見える。

○奈良帝室博物館　大正初期　出典:「目で見る大和路」藤井辰三 昭和62年

・クロマツが生長し、高さの揃った樹林となっている。正面の円形植栽地は主に芝地となっている。

○南大門　大正7～昭和7（葉書様式より推定）

・南大門手前の参道から大仏殿に至るまで、両側に生長したマツが立ち並ぶ。成木の間にはマツの若木が見られる。

○浅茅ヶ原付近　　出典:「奈良名勝写真帖」奈良市役所 大正4年発行

・浅茅ヶ原付近は、個別には状況が異なるが、基本的な構成は現況と大きな差異が無い。

「一の鳥居」両側はマツ混じりのスギ林

「梅林と円窓亭」　ウメが適度な間隔で並ぶ

「八方亭」　クスノキ大木、アセビが見られる。

大正期の主要植栽の変化

・興福寺　・・・・・・・・花の松は健在。クロマツの大木が多く見られるが、明治期に植栽されたサクラの生長が目にとまるようになっている。

・猿沢池　・・・・・・・・楊貴妃桜は不明。衣掛柳は健在。公園整備により植栽されたマツやサクラ、シダレヤナギが生長し、景観の骨格となっている。

・国立博物館　・・・・マツが生長し、高さの揃ったマツ純林となっている。

・南大門参道　・・・・公園整備によりクロマツが生長し、多世代のマツによる並木となっている。

・大仏殿周辺　・・・・不明

・浅茅ヶ原周辺・・・・基本的な構成は現況と大きな差異が無い。

・春日大社　・・・・・・参道の両側はスギやマツ。大きな変化はない。

4. 昭和（戦前期）

○主な出来事

・昭和 7年（1932）東大寺旧境内　史跡指定

・昭和14年（1939）紀元2600年奉祝として、春日野運動場付近に山桜100本、同水泳場付近に楊貴妃・虎尾など50本植栽し、桜園を創出。興福寺では花の松2世を植樹。東大寺では、植栽による風致保存を実施。

・昭和15年（1940）東大寺および興福寺境内地を奈良公園区域から除外

○写真　五重塔からの眺望（興福寺境内）　昭和11年（1936） 出典：奈良大学図書館所蔵　北村信昭

・境内はほぼクロマツ純林。植栽されたクロマツも十分に生長し、植栽密度も高くなっているように見える。

○絵葉書　猿沢池　昭和8～昭和20（葉書様式より推定）

・五十二段西植栽地のクロマツが生長し、五重塔を隠し始めている。五重塔は３層見える。池畔のシダレヤナギは生長しているが、サクラは画面内に確認できない。

○写真　五重塔からの眺望（猿沢池）　昭和11年（1936）　　出典：奈良大学図書館所蔵　北村信昭

・池の南側の植栽地には、植栽直後と思われる樹木（マツ、落葉樹等）が見える。
・池畔全周にシダレヤナギが見える。
・五十二段西植栽地には、クロマツの他西寄りにサクラが見られる。
・三条通沿いには「植桜楓の碑」があり、その西に落葉樹（ナンキンハゼ？）の若木が４本見える。

○写真　五重塔からの眺望（北向）　昭和11年（1936）　　出典：奈良大学図書館所蔵　北村信昭

・花の松は衰退し、枯枝の剪定をうけているように見られる。
・登大路園地は、マツが生長し純林に見えるが、サクラやモミジらしき落葉樹も見られる。
　仮金堂東側には土塀が有り（現在はない）、その前にサクラらしい樹木の並木が見られる。

○写真　五重塔からの眺望（北東向）　昭和11年（1936）　　出典：奈良大学図書館所蔵　北村信昭

・登大路園地から国立博物館まで、マツの純林が続く。
・五重塔の直近に位置するマツが、頂部剪定を受けている。

○奈良公園改良計画　奈良県政調査（昭和12年）　　出典:『奈良公園史』354頁～355頁

昭和12年の県政調査には、公園行政と改良計画が記されている。当時は、改良事業は終わり急務とするものはなくなっており、改良計画も事業の仕上げの要素のものが多い。この中で特筆されるのは、架空電線の地下埋設化を進めていることである。事実、大正期の猿沢池では電線が見られるが、昭和期の写真には電線が見られない。

改良計画

本公園の雅趣は天下に卓絶し名勝地として指定されたるは当然と言うべく‥‥（後略）

（A）公園隣接民有地の買収　（省略）

（B）交通整備　（省略）

（C）公園内の架空電線を地化線に変更

公園内に電線の縦横に交錯し居ること及坦坦たる芝生の中あるいは風致樹の中に電柱の存するは、非常に風致を害し‥‥（中略）‥‥電話線の姿は一掃されたるも電灯線がその運びに至らざるを遺憾とす‥‥（後略）。

昭和（戦前期）の主要植栽の変化

・興福寺　‥‥‥‥花の松は昭和１３年に枯死。クロマツの大木が多く見られるが、明治期に植栽されたサクラの生長が目にとまるようになっている。

・猿沢池　‥‥‥‥楊貴妃桜は不明。衣掛柳は健在。公園整備により植栽されたマツやサクラ、シダレヤナギが生長し、景観の骨格となっている。

・国立博物館　‥‥マツが生長し、高さの揃ったマツ純林となっている。

・南大門参道　‥‥公園整備によりクロマツが生長し、多世代のマツによる並木となっている。

・大仏殿周辺　‥‥不明

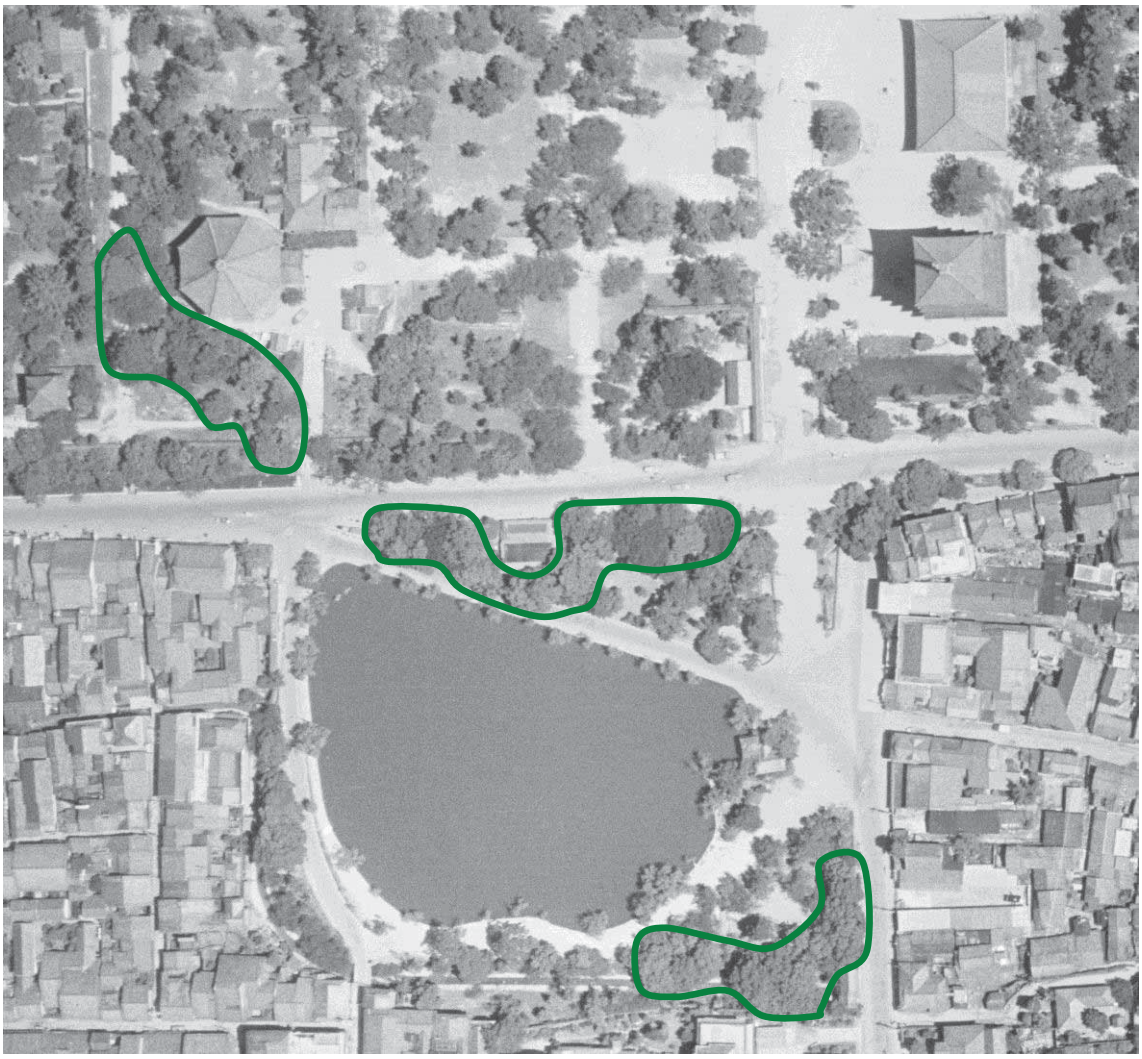
・春日大社　‥‥‥不明

5－1. 昭和（戦後期）～シルクロード博覧会

○主な出来事

・昭和36年（1961）第2室戸台風。被害木は公園平坦部で約2000本。
・昭和40年（1965）奈良の八重桜が県花指定。以降に各園地に八重桜を植栽。
　　新県庁舎竣工。
・昭和42年（1967）興福寺旧境内　史跡指定
　　荒池園地開設
・昭和47年（1972）奈良国立博物館　陳列館新館竣工
・昭和55年（1980）奈良公園開設百年記念植樹で公園、社寺、博物館にクロマツを植栽。
・昭和62年（1987）奈良県新公会堂竣工
・昭和63年（1988）なら・シルクロード博開催
・昭和63年（1988）春日野園地（春日野運動場跡）および浮雲園地・三社池（春日野水泳場および児童遊戯場跡）、奈良公園館（春日野庭球場跡）再整備。

○航空写真　興福寺・猿沢池　　昭和36（1961）



・生長した高木が多く見られ、樹木密度が高まっている。
・南円堂付近や五十二段西植栽地、猿沢池南東植栽地に広葉樹の大木が見える。

○航空写真　猿沢池から登大路　　昭和30年代　　出典:「昭和の奈良大和路」入江泰吉　平成23年発行

・南円堂付近や五十二段西植栽地、猿沢池南東植栽地に広葉樹の大木が見える。
・登大路園地は、マツの疎林に見える。

○興福寺　　昭和30年頃　　出典:「昭和の奈良大和路」入江泰吉　平成23年発行

・花見の風景。昭和24年から34年まで奈良市で「桜まつり」が開催されていた。
・マツ疎林の中に、サクラが見られる。

○写真:興福寺仮金堂基壇上　昭和60(1985)　　出典:「目で見る大和路」藤井辰三 昭和62年

・多世代のマツの生育が見られる。植栽密度が高い。

○写真　魚佐旅館から猿沢池、五重塔　昭和60(1985)　出典:「目で見る大和路」藤井辰三 昭和62年

・マツや常緑広葉樹が生育し、密度が高く見える。この写真には、サクラは見当たらない。

○県庁前四車線道路　昭和43年(1968)　　出典:「奈良市今昔写真集」 樹林社 平成20年発行

・登大路園地はマツの並木で、広葉樹は見当たらない。

○奈良国立博物館　本館　昭和63年(1988)　　出典:「奈良シルクロード博 公式記録」平成元年発行

・登大路園地から国立博物館構内までマツが連続する。
・国立博物館構内のマツは、多世代のマツが見られる。松枯れによる更新の結果と考えられる。

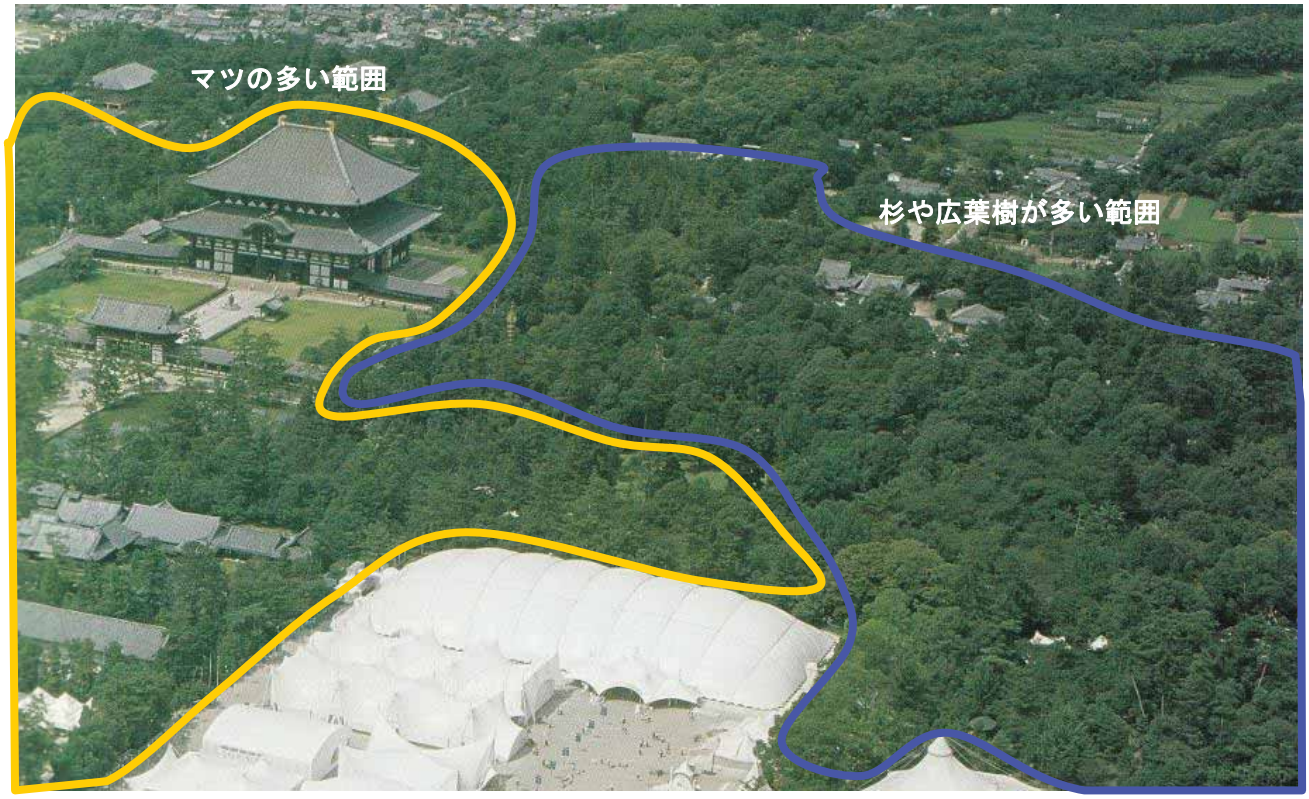
〇南大門参道　昭和30年代前半　　出典:「昭和の奈良大和路」入江泰吉　平成23年発行

・十分に生育したマツ並木

〇南大門参道　昭和59(1984)　　**出典**:「目で見る大和路」藤井辰三　昭和62年

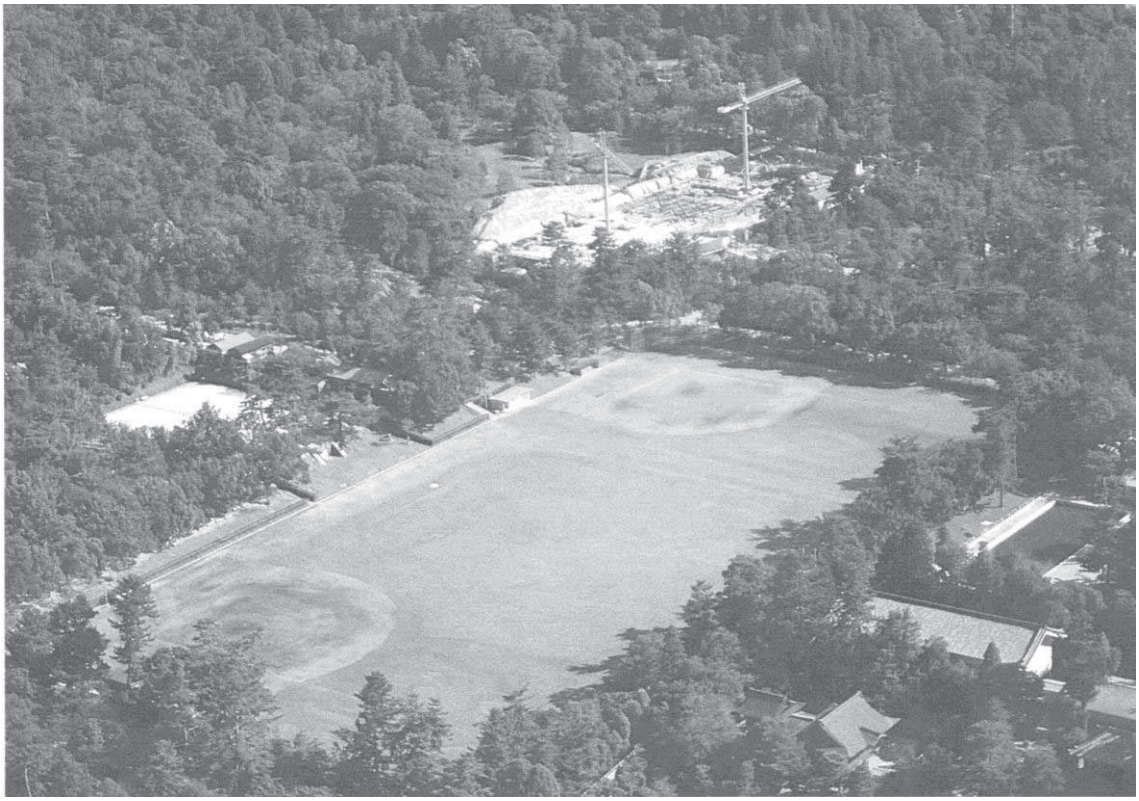
・マツ並木がまばらに見える。マツが衰退したように見える。

○奈良国立博物館　本館　昭和63年（1988）　　出典：「奈良シルクロード博　公式記録」平成元年発行



・大仏殿周辺はマツが多く、二月堂から手向山神社にかけてはスギや広葉樹が多い。

○春日野グラウンド　　昭和60年（1985）頃　　出典：「奈良シルクロード博　公式記録」平成元年発行



・春日野グラウンド周辺は生長した樹木がある。グラウンド周辺にはマツが、春日大社に近い南側はスギが見られる。

５－２．植栽関係の記録　　昭和（戦後期）～現在

1）第二室戸台風と奈良公園整備対策委員会　昭和36（1961）　出典:奈良公園史467頁

○第二室戸台風被害　昭和36年9月16日

公園平坦部	約2000本
春日山付近一帯	約98000本
東大寺・興福寺・春日大社	多数

○奈良公園整備対策委員会

第二室戸台風を機会に、奈良公園の復興と恒久的な整備を図る方針を固め、同年11月15日奈良公園整備対策委員会を設置した。

2）春日大社境内原生林の台風被害対策について

○春日大社境内原生林調査結果　昭和52年3月　出典:奈良公園史自然編 90～95頁

座談会　春日の社
日　時　昭和52年2月27日
出席者　赤城郁恵、川道武男、北川尚史、小清水卓史、小舟武司、菅沼孝之、谷幸三他

・92頁右　小清水「（前略）台風のたびに、それ（スギ）が倒れたのですが。ここの土って言うのは土地が浅い。ですから浅い根が張っているだけなので風で直ぐ倒れ易いんですが、古人の知恵でしょうかね。台風の来る方向、風の当たる方向には風に対して一番抵抗力の強いイチイガシをちゃんとまぶしてあったんですよ。ですから、イチイガシが厳然としている場合にはね、大木になってもスギが倒れない。（後略）」
・92頁右　平田「（前略）鎮守の森で、スギが天然物であるというのは全国でも極めて少ないですね。」小清水「おそらく無いでしょうね」
・95頁右　小清水「（前略）台風の方向に応じて、台風被害を受けないような木をまぶして、又木陰にもなるような木なども植えて混交林としてあってほしいです。先ほど申しましたように、イチイガシと杉の木って言うのはお互いもたれ合っていたので、それを忘れてしまって片方だけが目立ったからといって、それだけを植えるようなことがないように‥‥（後略）」

3）奈良公園整備計画　昭和38（1963）　出典:奈良公園史 469頁

1. 計画概要　抜粋

平坦部　園地計画

中央に広々とした芝生の広場を取り、樹木を点在させ、年齢・性別を問わず広く大衆に利用できる憩いのところを作る。市街隣接地は公園地の緩衝地帯として、樹木密植し、市街地の目隠しと防災を兼ねた植栽を行う。

(1) 興福寺付近整備事業

興福寺の伽藍を取り囲む地区で猿沢池、旧奈良学芸大学跡の一部及びその付近である。この地区の整備は、興福寺の伽藍と市街地の緩衝地帯として植栽ならびに一部芝生の広場で構成する。

・猿沢池の付近　　猿沢池及び尾花川の護岸改修及び池の浚渫のための水抜を新設し、市街地と接する所には目隠の植栽を行う。なお、利用者の便を図るため、水呑場を新設する。

(2) 浅茅ヶ原付近整備事業

この区域は、公園の南に位し水景に乏しい奈良公園にあつて荒池・蓬莱池と二つの池を取り囲むゆるやかな傾斜のある変化に富んだ場所である。

・浅茅ヶ原　　春日参道沿いには、樹木密植し、神域としての威厳を保ち、中央ひょうたん池付近に芝生の広場を取り、南側斜面は主として赤松を植える。園内池及び水呑場、便所を設置し照明を行う。

2. 事業実施　昭和38年～昭和47年

4）植樹　昭和40（1965）～　　出典:奈良公園史 502頁

①ナラノヤエザクラ植樹

昭和43年「ナラノヤエザクラ」を奈良県の花に指定し、以降奈良公園及び県内の公共施設を中心に植樹した。

表：ナラノヤエザクラの公園内への植樹状況

年度	数　量(本)
昭和40	25
昭和46	289
47	202
48	784
49	518
50	462
51	238
52	300
計	2,818

若草山山麓に植樹

※樹木分布調査(2013)で確認されたナラノヤエザクラ　現存本数　652本　見掛け残存率 23%

②円窓梅林

昭和40年から円窓梅林の復興のため、梅の苗木200本、赤松60本を植栽した。

※樹木分布調査(2013)で確認された付近のアカマツの現存本数　9本　見掛け残存率　15%

5）奈良公園の松食い虫被害　　出典:奈良公園史自然編 80頁

・奈良公園では昭和47，8年頃より急激に被害木が増加し、現在なお被害が継続している。
・奈良公園の平坦部の被害を少なくするために、昭和35年前後より薬剤散布が行われているが、被害の鎮圧に有効な数字は出ていない。

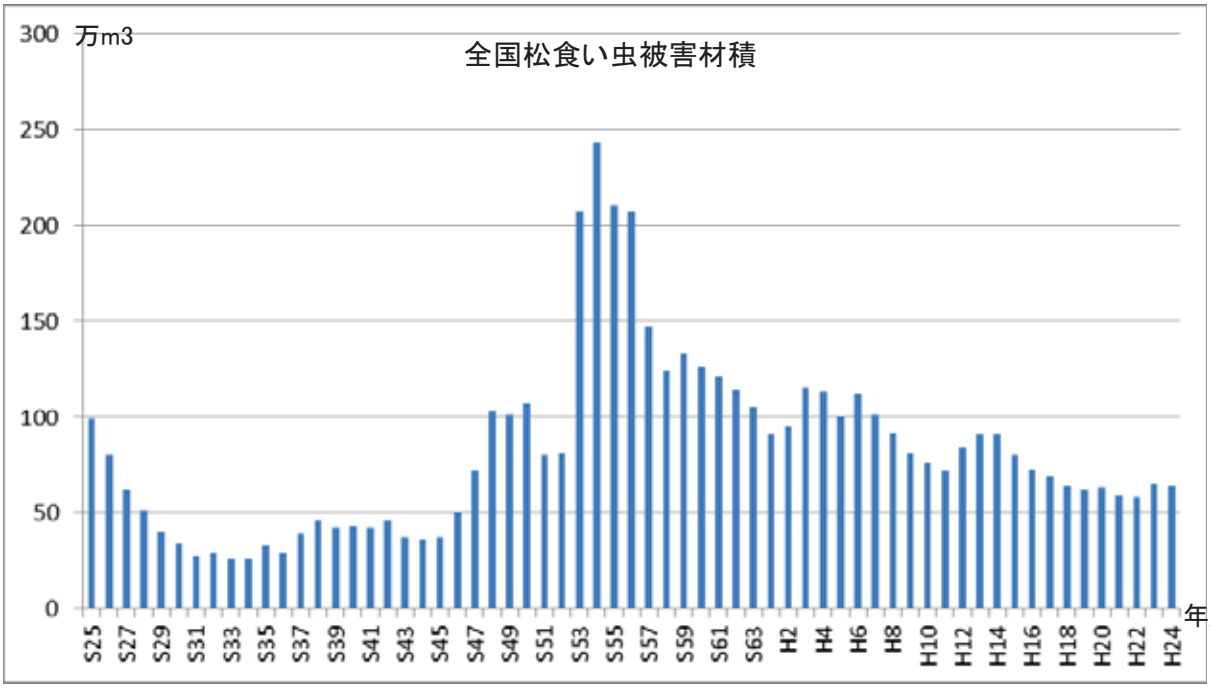
表7-4　奈良公園における松立木の被害本数

年次	平坦部	山地部	計
昭和46年	7	30	37
47年	17	0	17
48年	19	121	140
49年	28	86	114
50年	23	72	95
51年	10	65	75
52年	197	25	222
53年	46	423	469
54年	72	873	945
55年	82	517	599
計	501	2,212	2,713

●参考　松食い虫被害の歴史

松食い虫被害は北米産の侵略的外来生物であるマツノザイセンチュウによって引き起こされるもので、日本で最初のマツ集団枯損は1905年長崎市周辺で発生した。その後1914-15年頃には兵庫県赤穂市でも被害が発生し、以後九州山陽地方に被害が広がった。戦中戦後はマツ枯れ防除の余裕もなく被害が拡大したが、戦後は林野庁や各自治体が強力に伐倒駆除を進めた結果、一時被害は沈静化した。

しかし1950年代の燃料革命や化学肥料の普及等によりマツ林の利用が大幅に減少し、土壌が富栄養化してアカマツには不適当な環境になったため、防除の努力にもかかわらずマツ枯れ被害は1970年代から再び増加に転じ、1979年(昭和54)には被害のピーク243万m3を記録している。以後漸減傾向は見られるが、近年においても60万m3前後の被害が続いている。



6）奈良公園開設百年記念植樹祭　昭和55（1980）　出典:奈良公園史 518頁

・昭和55年3月「奈良公園開設百年記念植樹祭」を行い、浮雲園地に高さ3メートル(8年生)のクロマツの苗木を植えた。
・奈良公園の緑の中心となっている松は松食い虫の被害で枯れる木が目立つので、公園開設百年を機会に、公園平坦部にある松4600本の半数にあたる2300本を植樹することにした。

表：クロマツの植樹本数

施工者	数　量(本)
奈良県	800
東大寺	800
春日大社	500
奈良国立博物館	150
興福寺	50
計	2300

植栽後本数(計算値)　6900本

※樹木分布調査(2013)で確認されたクロマツの現存本数　1332本　見掛け残存率　19.3%

7）奈良公園整備研究委員会提言集　昭和53（1978）　平坦部植栽に関わる意見の抜粋

委員：朝日稔、上野桂人、四手井綱英、高口恭行、高橋理喜男、中村一、森蘊、保田興重郎、吉村元男

朝　日：奈良公園の特色であるシカの群れと芝生、松林も千数百年に及ぶ歴史の所産であり、文化遺産である。

四手井：公園内の樹林は老齢のものから逐次枯損するので、恐らく、たえず植えついで行かなければならないであろうが、そのための樹種選定には街路樹と共に十分注意して頂きたい。針葉樹では、クロマツ、アカマツ、スギ、ヒノキ、常緑広葉樹ではカシ類、シイ類、ツバキ、落葉広葉樹ではサクラ類、シデ類、低木では常緑のアセビが第一であろう。

森　　：公園内には梅や桜や楓が好ましい。殊に梅は中国の象徴的な植物であり、旧一乗院寝殿前にも見られるように、平安時代の中頃では、寝殿の前面は左近桜ではなくて、左近梅を植えていた。梅も桜も奈良公園には好ましい植物である。(中略)メタセコイヤ、ヒマラヤシーダよりは、松、杉、桧など在来のものが良いと思う。

保　田：奈良公園の風情としては、梅林が欲しい。一箇所に集める必要は無い、老梅樹があちこちにあるのも良い。藤の花は，(中略)奈良の都の望郷の花である。さらに万葉集の風情に深い縁のあらアフチ(センダン)の花も公園に欲しい。

8）奈良公園の保全と将来構想　昭和55（1980）　抜粋

出典:奈良公園史 522頁

奈良公園整備研究委員会の提言には「奈良公園は、千数百年の歴史を受け継いで作られた歴史的文化遺産で、都市近郊にあって、よく保存された自然と文化財が一体となった世界的公園である。今後、これらの優れた文化財と自然景観の保全を図りつつ、静的な利用をする公園として整備すべきである」との統一見解が述べられている。

県は、こうした奈良公園の性格を踏まえ、同公園の将来にわたる保全と整備についての構想を立てた。これは、奈良公園平坦部と山林部とそれぞれに、将来の同公園管理運営についての指針と言うべきものである。

平坦部

（一）園地の保護整備について（抜粋）

・「静的に利用する公園」として園地保護に努め、球技等活動的な利用の規制を強化する。

・都市施設としての近隣公園、運動公園は奈良公園外に設置し、公園利用者の拡散を図る

（二）植栽計画

公園内の樹木は老齢のものから順次枯損し、台風、病害虫などによっても損傷するので、毎年継続して植栽を進める。また公園平坦部への植栽樹種は、幽邃閑雅で表現される格調高い奈良公園自然環境を育ててきた古来の樹種に限定し、概ね次のとおりとする。

針葉樹　　クロマツ、アカマツ、スギ、ヒノキ
常緑広葉樹　カシ類、シイ類、クス、ツバキ
落葉広葉樹　サクラ類、カエデ類、ウメ、シデ類、フジ、百日紅
低木　　アセビ

（三）交通対策及び駐車場（省略）

（四）関係社寺などとの調整（抜粋）

・（前略）実際は、それに隣接する社寺境内地、博物館構内なども含めた面積と受け止められ、これらは渾然一体となって、特徴ある環境をかたちづくっている。

・現在、奈良県、奈良国立博物館、東大寺、春日大社によって奈良公園運営協議会が組織され、松食虫対策、マツの植栽計画、塵芥対策、公園内行商など、公園の保護利用上、共通で重要な問題について協議調整が行われているが、今後は一層素の適切な運営が必要である。

（五）ゴミ対策

（六）シカ対策

山林部

（一）春日山

イ　風穴地対策　（省略）
ロ　ナギ対策（省略）
ハ　ナンキンハゼ対策（省略）
ニ　若草山隣接地対策（省略）

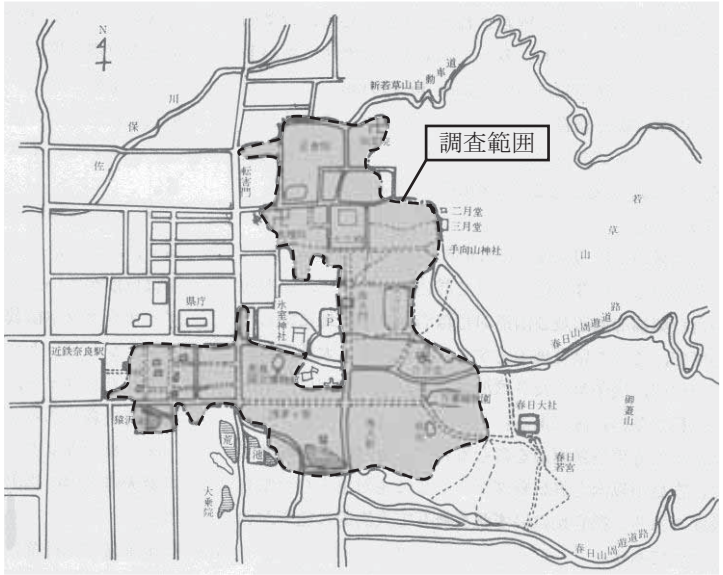
（二）花山および整理更新地区（省略）

9）奈良公園平坦部の大径木　松本ちさ　昭和55(1980)

出典:奈良公園史自然編 35～39頁

樹種 / 胸高直径(cm)	広葉樹																										
	イチイガシ	サクラ類	スダジイ	クスノキ	ナンキンハゼ	シラカシ	イヌシデ	アラカシ	イロハカエデ	コジイ	ケヤキ	エノキ	イヌガシ	エゴノキ	ハンノキ	シリブカガシ	コナラ	ムクノキ	ナナメノキ	クロガネモチ	ムクロジ	カゴノキ	リンボク	アキニレ	ヤナギ類	カラスザンショウ	計
30～50	221	271	191	150	139	116	74	72	66	31	17	18	23	22	14	14	9	8	11	10	1	7	6	3	5	5	1,504
50～85	85	36	52	71	15	6	30	20	2	31	24	7	1	0	3	3	6	4	3	2	5	2	2	4	1	0	415
85～140	22	0	0	11	0	0	0	0	0	0	8	8	0	0	0	0	1	2	0	0	4	0	0	0	0	0	56
140～	5	0	0	2	0	0	0	0	0	0	1	0	0	0	0	0	0	1	0	0	1	0	0	0	0	0	10
50～計	112	36	52	84	15	6	30	20	2	31	33	15	1	0	3	3	7	7	3	2	10	2	2	4	1	0	481

樹種 / 胸高直径(cm)	針葉樹											
	クロマツ	スギ	アカマツ	ヒノキ	ナギ	モミ	イチョウ	カヤ	イヌマキ	メタセコイア	ダイオウマツ	計
30～50	調査対象外											
50～85	667	177	73	51	29	27	12	1	1	1	1	1,040
85～140	21	43	0	1	1	1	2	1	1	0	0	71
140～	0	6	0	0	0	0	0	0	0	0	0	6
50～計	688	226	73	52	30	28	14	2	2	1	1	1,117



10）公園区域の樹木本数　昭和59.4.1(1984)

出典:奈良公園整備基本計画報告書 昭和60年

	針葉樹									広葉樹										
種数	12									75										
樹木本数	クロマツ	スギ	アカマツ	イヌマキ	モミ	カヤ	ヒノキ	イチョウ	その他	サクラ類	カエデ類	イチガシ	サルスベリ	ナンキンハゼ	シラカシ	ウメ	イヌガシ	クスノキ	アラカシ	その他
	1,810	470	300	150	50	30	17	70	63	2590	630	500	350	320	230	210	200	190	150	1,990
	2,960									7,360										

11）奈良公園整備基本計画報告書　抜粋　　昭和60年(1985)

問題点(44、45頁)

・花木の名所としての場が少ない。

・サクラは園内に広く分布し、植栽本数も多いが、それを利用したお花見広場や並木などはない。

みどりと鹿及び公園利用に対する基本計画(62頁)

・鹿対策を行って花木の充実と寝転がれる芝生地を設ける。

花木の充実について(62頁)

・猿沢池から蓬莱池に至る水辺のゾーンにサクラや四季の花木を充実させ、季節的な賑わいのある場所として計画する

12）奈良公園整備基本設計説明書　抜粋　平成元年(1989)

登大路地区　整備方針(4頁)

・樹木の密度が高い部分については、移植を前提に間引きする。(※)

・奈良公園らしさの代表的樹木であるナラノヤエザクラ、ココノエザクラを植栽する。

春日野地区　整備方針(8頁)

・春日野園地にサクラを植栽し、奈良公園の新しいサクラの名所を作る。

※基本設計図と現況を比較すると、間引きは未実施と思われる。

13）マツ類、サクラ類、カエデ類の樹木本数の推移

	クロマツ	アカマツ	サクラ類	カエデ類
公園樹木本数（S59 1984） 出典：奈良公園整備基本計画報告書14頁	1,810	300	2590	630
公園樹木本数(H12 2000) 出典：奈良県資料「公園樹木台帳」（2000）	1,046		1695	848
県事業地内の樹木（H25 2013） 出典：樹木分布調査	621	55	1439	928
見掛け残存率 2013年/1984年	34%	18%	56%	147%

注：県事業地には、公園区域の他に県庁、文化会館等が含まれる。

5-3. 航空写真の比較　（1961・1979・2008）

(1) 興福寺旧境内

○１９６１年　⇒　１９７９年

・県庁、駐車場、文化会館、登大路等が整備され、植栽整備が行われた。（赤枠）

・興福寺及び公園区域内に、相当数の若木が植栽され、樹木本数が倍増した。興福寺境内は、過密状況が伺える。

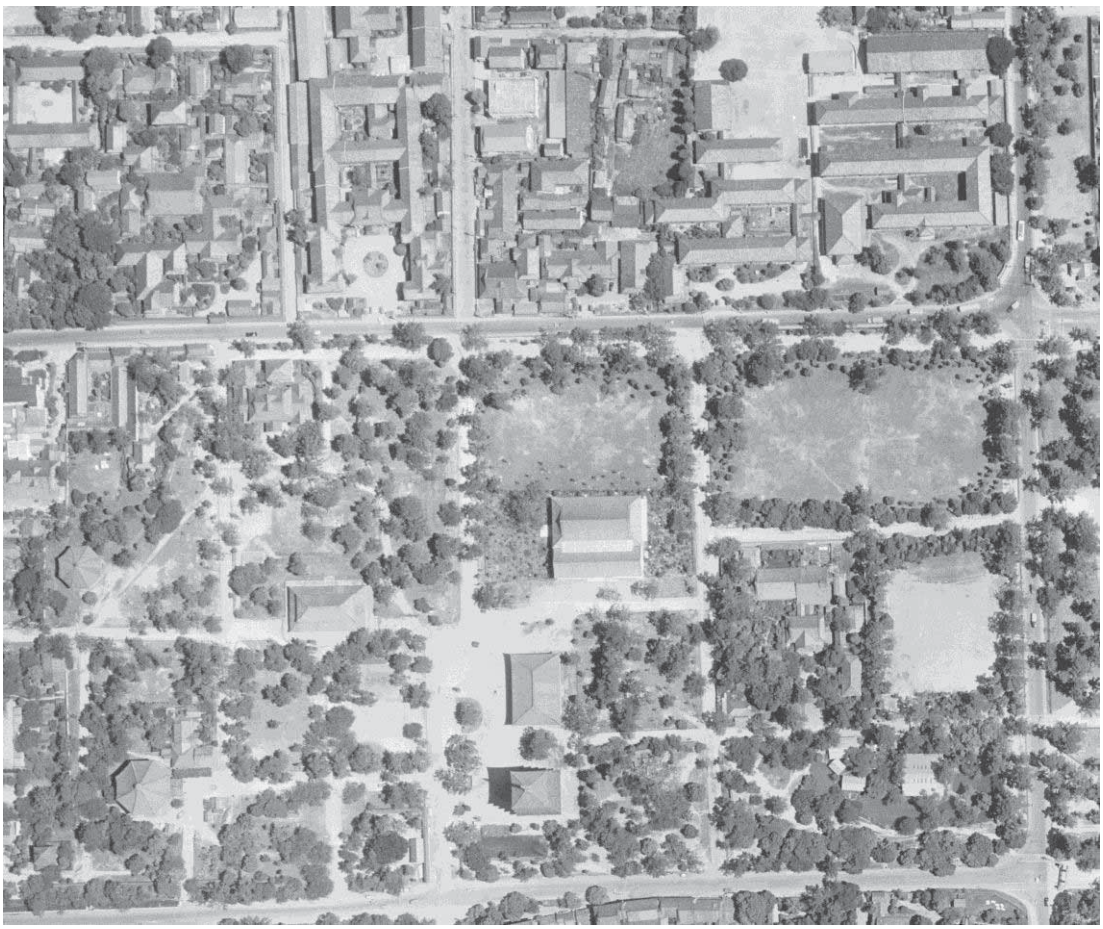
○１９７９年　⇒　２００８年

・登大路園地部の駐車場が公園として整備され、芝地が増大している。（赤枠）

・興福寺境内は、発掘や遺跡の復元･表示等により伽藍中央の樹木が無くなった。（青枠）

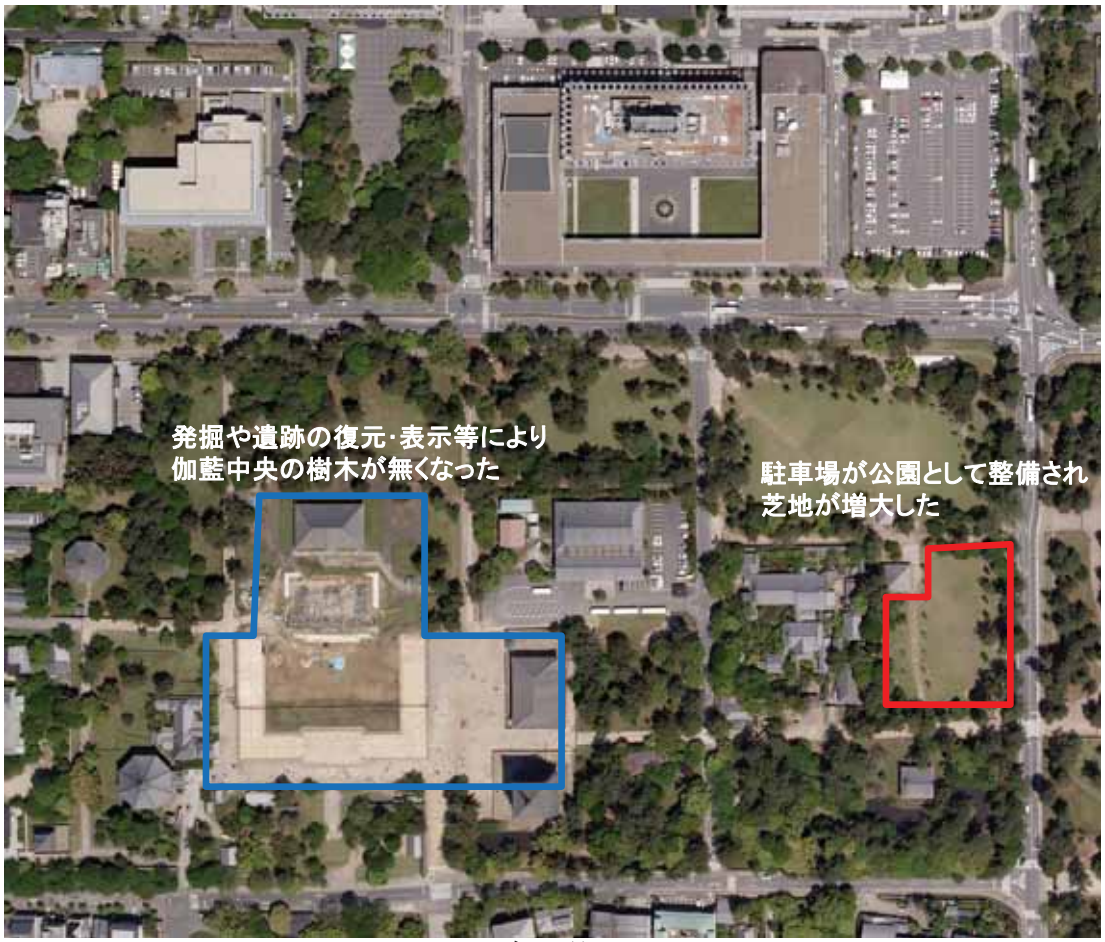
・全体に樹木の樹冠が大きくなると共に、樹木本数が大幅に減少している。特に、広葉樹の樹冠の生長が目立つ。

・利用等に起因する芝地内の裸地部が減少し、芝地が均質となっている。



１９６１年６月１９日　（第２室戸台風被害直前）

１９７９年９月１１日（奈良公園開設百年記念植樹祭直前）



２００８年５月１５日

(2) 国立博物館周辺

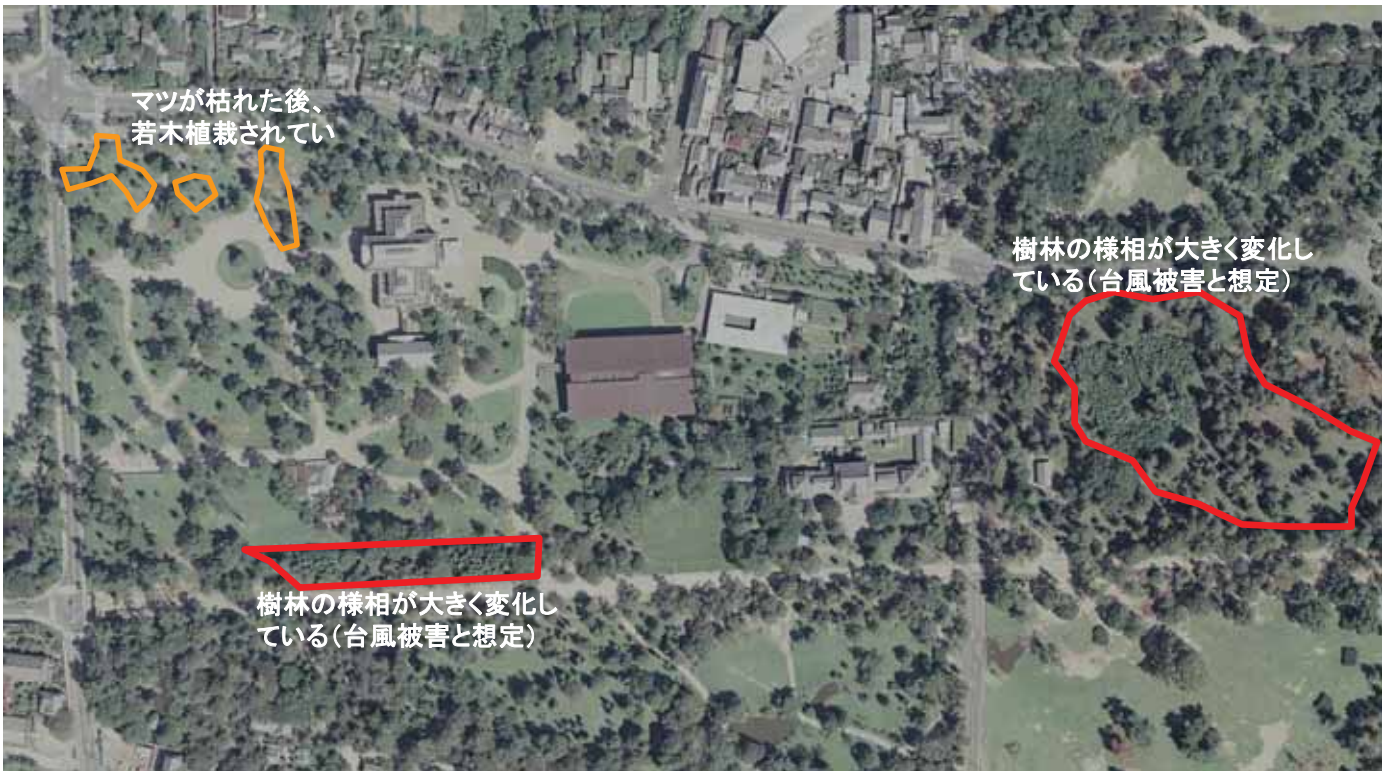
○１９６１年　⇒　１９７９年

・国立博物館本館周辺のマツが、若木に置き換わっている。(マツ枯被害と考えられる。)
・春日大社境内樹林(赤枠)が大きく変化している。（第２室戸台風の被害と考えられる。)
・国立博物館構内北西部の一部(橙枠)が、マツから常緑広葉樹(クス・シイ等)に樹種変更されている。(橙枠)

○１９７９年　⇒　２００８年

・浮雲園地(白枠)が整備され、樹林地が大きな芝地に変化した。
・国立博物館の新館が整備され、構内に駐車場(青枠)が整備されている。
・国立博物館本館周辺のマツが大きくなると共に、一部が若木に置き換わっている。
・国立博物館構内北西部(橙枠)の常緑広葉樹(クス・シイ等)が大きくなっている。
・利用等に起因する芝地内の裸地部が減少し、芝地が均質となっている。

１９６１年6月１９日　（第二室戸台風被害直前)



１９７９年９月１１日（奈良公園開設百年記念植樹祭直前）

２００８年５月１５日

(3) 東大寺南大門参道

○１９６１年　⇒　１９７９年

・南大門前のマツ(赤枠)が無くなっている。(マツ枯れ被害と考えられる。)

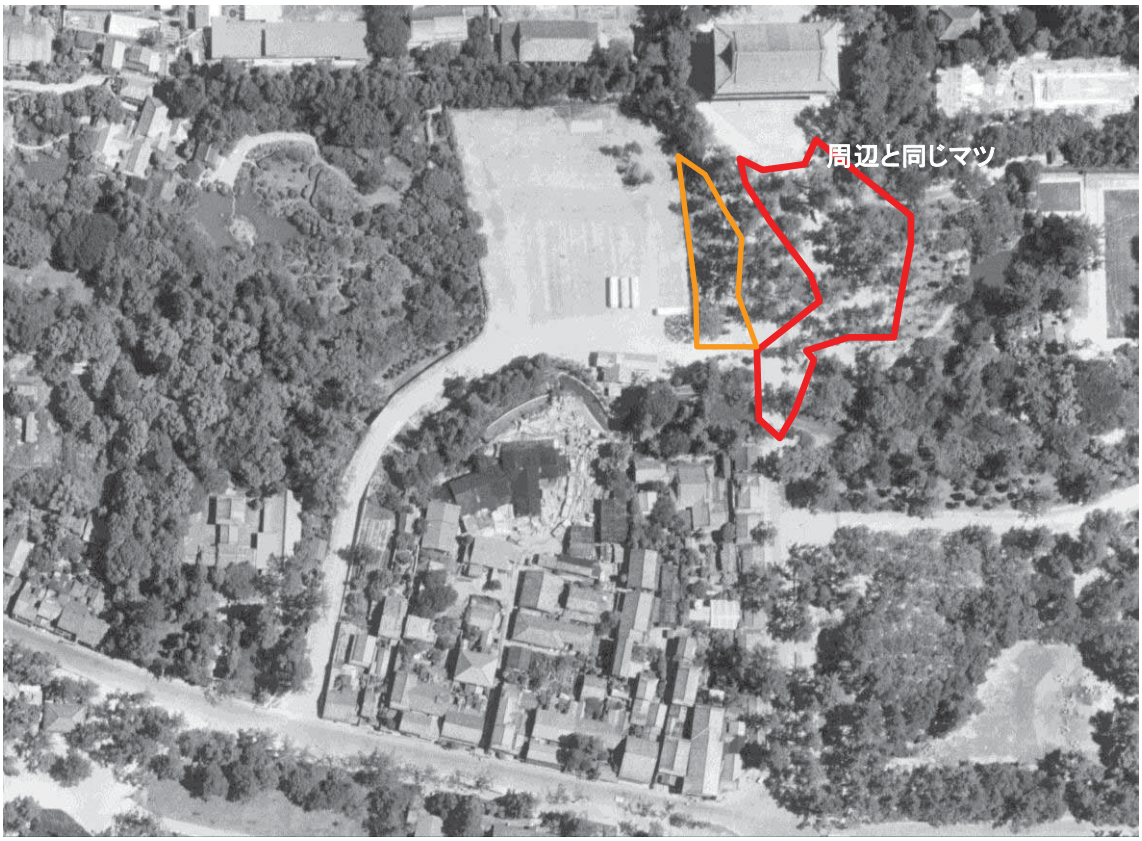
・大仏前駐車場横のマツ(橙枠)が常緑広葉樹に樹種変更されている。

○１９７９年　⇒　２００８年

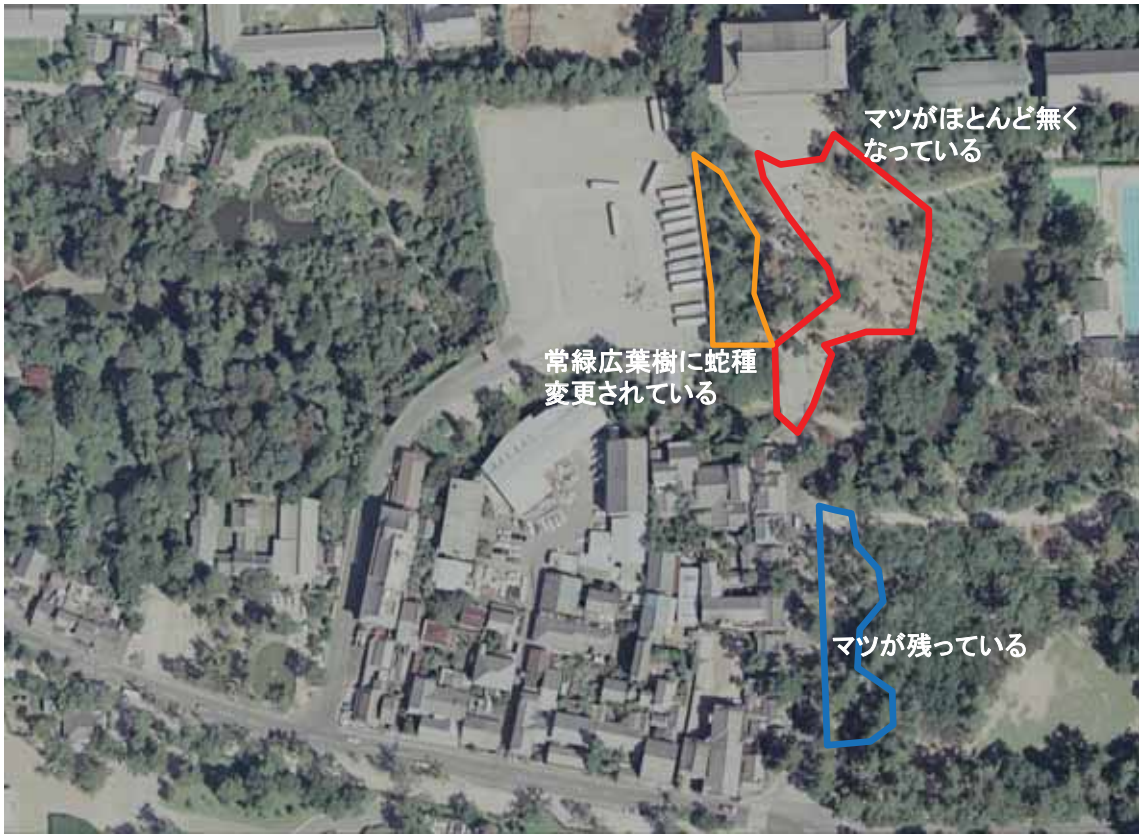
・三社池付近(白枠)が整備され、プール等が庭園的な園地に変化した。

・大仏前駐車場横の常緑広葉樹(橙破線枠)の樹冠が大きくなり、一群となった。

・浮雲園地に近い参道のマツ(青枠)が無くなっている。(マツ枯れ被害と考えられる。)



１９６１年６月１９日　(第２室戸台風被害直前)



１９７９年９月１１日（奈良公園開設百年記念植樹祭直前）

２００８年５月１５日

(4) 東大寺大仏殿参道

○１９６１年　⇒　１９７９年

・戒壇院から西塔跡付近のマツ林(橙枠)が殆ど無くなっている。(マツ枯れ被害と考えられる。)

○１９７９年　⇒　２００８年

・西塔跡の南側(赤枠)に駐車場が整備された。

・全体に樹木の樹冠が大きくなった。特に、シデ等の広葉樹の樹冠の生長が目立つ。

１９６１年６月１９日　(第２室戸台風被害直前)

１９７９年９月１１日（奈良公園開設百年記念植樹祭直前）

２００８年５月１５日

昭和(戦後期)～現在の主要植栽の変化

終戦後から現在までは、台風被害やマツ枯れ被害、新たな公園整備、クロマツやナラノヤエザクラの大規模な補植など大きなインパクトが連続しており、めまぐるしく変化している。

・興福寺　・・・・・・・・昭和40～50年代の補植により過密状態となった。その後、伽藍中央部の植栽撤去、樹木衰退等により樹木密度は低下した。マツやサクラは衰退し、広葉樹が旺盛な生育を見せる。

・猿沢池　・・・・・・・・五十二段及び市街地隣接部は、サクラやマツの衰退と常緑広葉樹の生長が進み、現在はまばらに残るマツと強剪定された常緑広葉樹だけとなった。池畔のシダレヤナギは残っているが、近年はナラタケモドキ病により枯死を繰り返している。

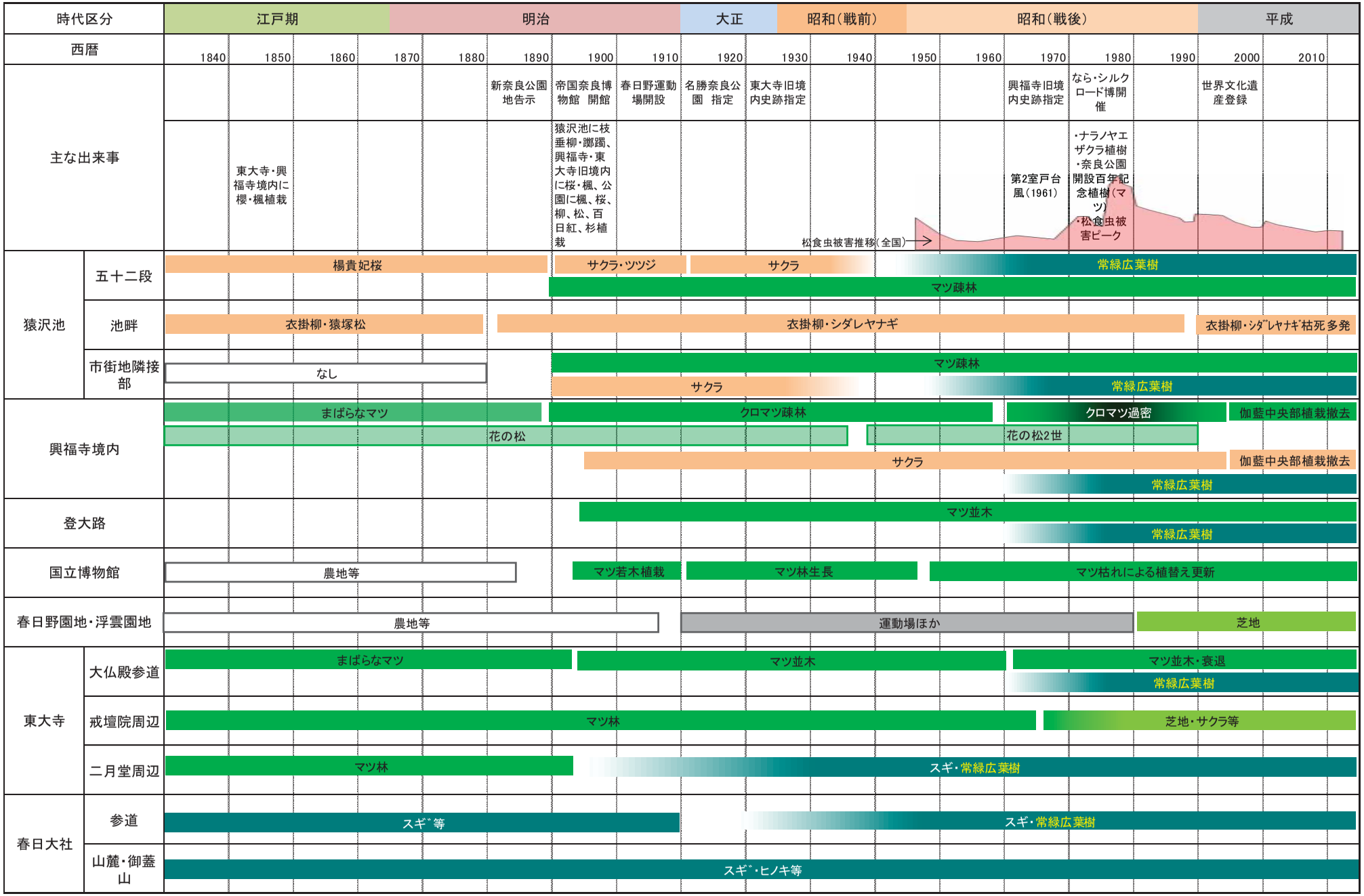
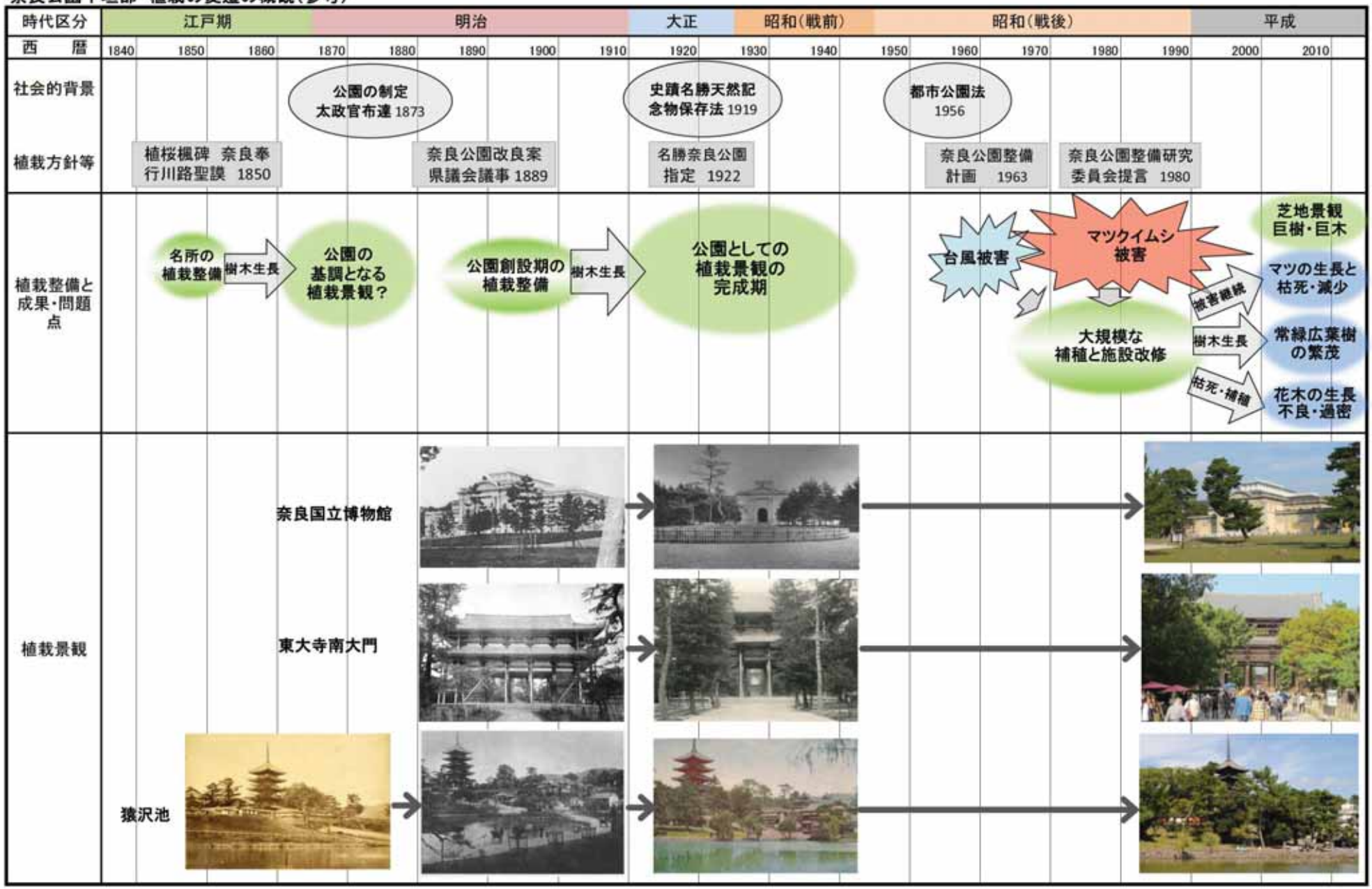
・国立博物館　・・・・度々マツ枯れ被害が発生し、マツの補植が行われている。このため、マツ林は多齢林化した。構内北西部の一部は、マツの代わりにクスやシイなどの常緑広葉樹に樹種変更された。マツ枯れの被害は近年も継続しており、一部芝地化している。

・南大門参道　・・・・昭和30年頃まではマツ大木の並木が見られたが、マツ枯れ被害のため徐々に減少し、常緑広葉樹に変わっていきている。特に南大門以北はマツが減少し、マツ並木に見えない。

・大仏殿周辺　・・・・戒壇院や西塔跡周辺は昭和40年代のマツ枯れの被害が大きく、マツ林が壊滅した。その後芝地化しサクラ等の花木が植栽されたり、駐車場に転用されている。

・春日大社　・・・・・・第二室戸台風によりスギ林が大きな被害を受けた。そのほか、スギ林に混じるマツのマツ枯れの被害が大きく、マツの本数が激減した。現在、マツは少なくなり、スギとイチイガシ等の常緑広葉樹等が多く見られる。

奈良公園平坦部　植栽の変遷イメージ



奈良公園平坦部　植栽の変遷の概観（参考）